

東北芸術工科大学生い立ちの記

大学設立の宣言

この大学は、悠久の大河最上川をつつんで、
蔵王連峰、出羽三山、朝日連峰に囲まれる

日本文化の源流、縄文の奥深い土壌の中から生まれた。

産業革命に始まる近代文明は、二十世紀末の今日に至って、
人類自らを存亡の危機に立たせている。

科学技術と経済理論によって支配された現代社会は、

それ故に、人類史を貫いてきた精神の尊厳、

人間であることの意味を、根底から問われるに至った。

目前に迫った新しい世紀は、戦争と平和、南北問題、

更には体制崩壊の問題を基軸とする新しい世界調和への展望、

そして何よりも、この母なる大地―地球―をいかにして守るか、

これら人類生存条件の解決こそ最大の課題ではなかるうか。

この大学は、芸術的創造と、人類の良心によって

科学技術を運用する新しい世界観の確立を目指して、

その課題に応えたい。

わが大学の前に道はなし。

あるは、歴史の実験のみ―。

東北芸術工科大学設立にあたって

―その理念と設立に至る経過―

学校法人 東北芸術工科大学 副理事長予定者
学校法人 瓜生山学園理事長 徳山 詳直

(一九九〇年八月二八日 東北経済連山形地域懇談会講演録より)

講演ということになっておりますが、山形といいますが、東北の地に魂まで奪われかけた男が、「東北に、こんな大学ができればどんなに素晴らしいだろうか」と、狂気のように走り回っている物語を少しお話させていただきたいと思っております。

先ほどご紹介にありましたが、私は隠岐島という日本海の孤島で生まれ育ちました。しかし、ここでこうして座っていることがじつは、私流にいいますと、決して偶然ではないような気がいたしております。山形のこの大地にとっても興味をもち始めてきた経緯の中に、ちよつと個人的に思いが込められておりますので、簡単にお話し申しあげたいと思います。

私の先祖は、これは過去帳に基づく話ですので、たぶん事実だろうと思えます。承久の乱(一二二一年)によつて鎌倉幕府から追放されて隠岐島に流された後鳥羽天皇のことはご承知だと思えますが、どうも、私の先祖は、天皇一行を縛つて隠岐に連れていったようです。つまり、悪方であったようです。二十年ばかり隠岐に流されている間に、後鳥羽上皇は崩御されました。察するに、後鳥羽上皇を監視している間に、その人徳にほだされて、心酔していったような気がいたします。後鳥羽上皇が亡くなつてすぐ出家いたしましたして、教音と名乗っております。高野山に参つて修行して

から、大峰山で業を積んだようです。その後、役行者が修行した跡をたどって全国を歩いて隠岐島に戻りました。帰ってからは生涯、後鳥羽上皇の霊を弔って墓守をしていたそうです。以来、二代、三代と教音法師と名乗っておりますので、私の先祖は後鳥羽上皇の墓守をしていたのではないかと思います。

こんなことを申し上げましたのは、私が山形になんとなく無縁ではなかったということを、あとで申し上げるためにお話いたしました。

ともかく、私は妙な男でございまして、小さいときからこの世に生まれて生きていることは、どこかで全部きちつとした縁で繋がっている。決して偶然ではないと思っております。今日、こうして皆様とお会いしたことも、私は決して偶然とは思っておりません。

京都でいま私がつくっている学校は、北白川に位置しております。ちょうど東北芸術工科大学のような小高い丘で、京都市内を一望に見渡せる場所でございます。ここは八世紀平安時代につくられた瓜生山城、北白川城とも呼ばれております城跡でございます。私は、この山をちょうど四十年前、二〇歳の時に見つけまして、以来四十年間、この山にとりつかれて今日までできてしまいました。

自分が好きになったこの小高い丘についていろいろ知るにつけ、聞くにつけ、なんといいますか、「後鳥羽天皇を捕まえて、縛っていけ」と命令された場所は、今まさに私どもが学校をつくっている瓜生山城であったわけです。それから八〇〇年たって、私の先祖が「後鳥羽天皇に申しわけがない、お前があその山を占領して、そこに大学をつくれ。教育する場所をつくれ」と。しかも、「芸術の学校をつくれ」。つまり教音の教は教えるで、音は芸術だと。私はそう心得ております。そうすることによって過去さまざまな栄枯盛衰のなかで流れてきた日本のいわば歴史のなかに、なに

がしかの弔いをせよと、こう指示をされてあの山にとりつかれたと信じております。

実は山形に大学をという話は、ずいぶん前から知事さん、市長さんを始めとして、皆さんの中であったようでございます。ご承知の方もおられるかもしれませんが、三、四年前に日本航空の飛行機が御巢鷹山で落ちて数百人の方がなくなつた。そのなかにミサワホームの専務をしていた山本幸雄という人物がおりました。この人は歳は若かつたけれども、わたしは大変信頼しておりました。とても親しくしておりました。生き馬の目を抜くような建設業界にありながら、なかなかの人物だというふうに、私はかねがね尊敬しておりました。

この人が五年ぐらい前、つまり亡くなる一年ほど前に京都にこられて、山形に大学をつくつたらどうか。しかも芸術の大学をつくつたらどうか、あそこの自然環境はすばらしいという話をされました。これが山形との、私の初めての出会いでございました。それまでは、東京から北は、まったく足を踏み入れたことはありませんでした。

それからまもなく、最初にみえたのが、山形市の助役をしておられた渡部さんという方で、蜂谷という青年を伴って京都へまいりました。「山形に学校を誘致したい。あんたとこの学校はどうだろうか」という話を持ってこられました。最初は、ご多聞にもれず地方自治体が地方活性化のために大学を誘致しようという動きだと思っておりました。当時、全国いたるところに、ほんとうに雨後の筍のごとく大学誘致の運動が盛んでありましたから、私はそういう一連の話のなかの一つだろうと思つて、ほとんど問題にしませんでした。地方自治体が、地方の活性化のためというような名目だけで、いわば工場誘致と同じレベルで大学を誘致するなどということは、バカげていると、じつは私は真剣にそう思つていたし、いまもそう思つております。ですから、この話にはほとんど耳を傾けませんでした。

ところが、この人はなかなか誠実な方で、忍耐強く何度も足を運ばれて、これからの大学はこうあらねばならないんだという私の拙い意見をじっと耳を傾けて下さいました。「そういうことなら面白い。本気で取り組んでみるから協力してくれないか」という話をされてから、やがて金澤市長さんが、何度も京都まで、お見えになりました。

そうこうするうちに、県の副知事をしておられた高橋さんという方が、また熱心に、市長さんを伴ったり、あるいは単独で京都にこられました。私は熱意に、だんだんと感じいつてまいりました。

実は、東北についての私の行動はそれから始まったのではなく、ミサワホームの山本さんの話を聞いて以来、密かに東北という土地にたいへん興味をもち始めておりました。私はたいへん時代がかった考えを持つ性格で、とても大袈裟にものを考える男で恥ずかしいのですが、ともかく日本の国はこれからどうなっていくだろうか。こんなに豊かになったのに、どうして世界中のどこからも尊敬をされない民族だろうか。かねがね悲しく思っておりました。そんなわけで、なんとしても後世に残る、今日果すべき役割をもった大学をつくりたいという野心と希望に燃えて今日まで生きてきたわけですから、そこへ例えそれが偶然であろうと一いまは私は偶然だとは思っていませんけれども、山形からそんな話が舞い込んできたことは、天の啓示といえますか、そんなものを密かに感じました。

そこで、私の山形通いが始まったわけでございます。実は、今日で山形へは五〇回目でございます。その間、山形については隅から隅まで、ほとんど歩き回りました。行っていないのは朝日のほうだけでございます。ときとして、最上の水に流されてみましたし、蔵王の御釜の上で毛布にくるまってあの暖かみを感じてみました。それから月山に行き、羽黒に遊び、ほとんどの山形を歩いて

おります。しかし、市や県の方たちとお話をしながら、そのことをあまり申しませんでした。簡単に大学をつくれると思ってもらっては困る、ということだけを言い続けておりました。

ところが、とても不思議なことに、山形に興味をもつにつれて、東北の山々に非常に深い愛情を感じるようになってきました。羽黒に行ったときでした。ここは蜂谷という青年に一度連れていってもらったことがあるのですが、ご承知の、お湯がふつふつと湧いている湯殿山です。いつしか私は、そこへ紛れ込んでおりました。この時は、私一人で歩いておりました。

その湯殿山で、なんともいえない、痺れるような不思議な感動を覚えました。それからまた、私の家の過去帳を調べておりました。先程申し上げた教音が全国を歩いて青森まで行っております。私は恐らく、役行者はこの湯殿山にきているに違いないと思いました。役行者は青森で朽ち果てていますけれども、私の先祖の教音も行者の後を追って、きっとこの湯殿山に來たに違いないと確信しました。そして、青森を廻って隠岐島に帰って上皇の墓守をしながら生涯を終えたに違いない。そういうふうに思いますとなにか、誰かに頼まれたから、何かをしなければならぬから、だからあそこのことを考えてみようというのではなくて、いま申しあげたようなことを考えれば考えるほど、いつしか山形にずっと深い関わりがあったというように、すっかり思いこんでしまいました。

■大学創設の四つの命題

さて、話は本題に入りますが、私は本気で大学をつくるなら、四つの命題を基本に置くべし。これからつくる大学は現代文明に対する深い反省から出発しなければいけないと、私はそう思っています。

ますし、そのことを主張し続けております。人間とはいかにも悲しい存在で、いつから人類の文明が始まったか存じませんが、ともかく幸せになろうと思つて營々として働き続けて、悲しんで、苦しんで、戦争して、少しずつ、少しずつ豊かになろうと努力してきました。その結果が、今日の現代文明でございます。しかも、この現代文明が、たいへん危険な状態になっていることは、もうみなさん先刻ご承知だと思ひます。

したがつて私は、これからつくる大学は、現代文明が犯した過ちをどう正していくか、それを正していくためにどう一石を投じるか、このことを大きな使命とする大学でなければいけない。そうでなかったら、大学をつくる意味はまったくない。たいへん失礼ながら、山形の活性化のためという発想だけではけつして立派な大学はできないと思つております。だから、そのことを申しあげておきました。

現代文明の反省のうえに立つた大学とはなにか。新しい世紀に向けて、もはやいかんともしがたところまでできた人類の文明を、新しい世代のなかでどう活かすか。つまり、第一は、世界平和の問題をどう捉えていくか。これは大学の第一義的使命だと思つております。

二つ目は体制の問題です。不思議にも、昨年から東西の壁が破られて、新しい世界の状況が生まれてきた。まったく混沌としております。この体制の問題がどのように移り変わっていくか。そのために大学はどのような役割を果たせばよいのか。これが二つ目だと思つています。

三つ目は、私には孫がいま二人おりますけれども、もう可愛くて可愛くてどうしようもありません。きつと皆さんもそうだろうと思ひます。私たちは、けつこう幸せに、ともかく食べて、飲んで、遊んで、働いて暮らしております。けれども、息子や孫の時代がはたしてどうなっているだろうか。申し上げるまでもなく、地球環境問題は連日叫ばれ続けております。私達は幸せになろうと思つて

働いて頑張ってきたのに、それを息子や孫たちに残してやることができるのであろうか。そう思うと、この地球の汚染問題をどう捉えていくか、どう捉え直して地球の安全を未来に残していくか。これが三つ目の命題だと思えます。

四つ目はやはり世界全体の問題で、南北問題です。一方で豊かに生きる人々がいるかと思えば、他方アフリカの子どもたちに象徴されるような悲惨というほかはない貧しさ、その原因はどこにあるのか。南と北の格差をどう解決していくか。

この四つの命題が、これからつくっていく大学の基本的使命だと、私は考えております。

そういうことを考えながら、山形を中心にして、新潟、秋田、宮城、そして福島、だいたい山形を包む地方をほぼ走り回ってみました。いろいろの人達からずいぶん意見を聞かせていただきました。私は山形がこんなに好きになつたけれども、山形のためになにかしようなどと厚かましいことはまったく考えておりません。私は、東北のヘソの部分に位置したこの山形が、残された日本の最後の大自然であり、最後の砦だと信じておりますから、そこに新しい大学をつくる。そのためになにかしかの役割を果たすことができれば、たいへん幸いだと思っただけでございます。

東北だけが、唯一残された日本の大自然であります。これ以上むちゃな開発をして、大阪や東京のようにしてしまつたら、もはや日本の文化と伝統、民族の歴史は守り切れないで、遂に終わってしまう。私はそう考え始めました。ですから、日本が世界に向かって果たさなければならぬ役割は先ほど申し上げたようなことですけれども、私の意見にはずいぶん反対の方もおられるかもしれませんが、あえて申し上げると、いかにして東北の大自然を、縄文の文化をどう、守り続けて次の世代に手渡すことができるか。私は、これが東北に課せられた最大の任務だと、そう信じております。

しかも、山形は、日本海側からいっても、太平洋側からいっても、ちょうど中間に位置している。ちょうど東北全体のヘソの部分に当たる。蔵王を背景にして、朝日連山、出羽三山を向こうに見て、最上川がちょうど真ん中に流れている。こんなすごい盆地はおそらく二つとないと思います。

話が少し飛びますけれども、この最上川を通って、京都に北前船がどれだけやってきたことか。そして、京都と最上の歴史は、ご承知のようにたいへん深うございます。

■東北芸術工科大学設立の趣意

そんなふうに考えますと、この山形につくる大学は、山形大学であってはならない。東北大学でなければならぬと考えました。したがって、東北という名前がついて、山形という名前はつけませんでした。そして、芸術。重ねて申し上げますが、人類は数千年をかけて築きあげてきた自らの文明によって、地球もろとも滅び去ろうとしている。そんな時代になってきています。

私は、芸術にこの滅亡を阻止する力があると確信しております。今、文化と芸術を知る心を私たちは取り戻さなければいけない。つまり、日本民族の、あるいは人類の精神史を貫いてきた人間の尊厳は、どうにか芸術、文明によって守られてきました。芸術するところをいかにして取り戻すか、これ以外にはもう現代文明の過ちと対決する武器はないと、考えております。したがって、東北でつくる大学は芸術大学でなければなりません。

さらに、なぜ工科がついたのか。つまり、東北芸術工科大学になぜなったのか。申し上げましたように、現代文明はまさに、工学の発達を極めて、今日花開いたかにみえております。現代文明を決して否定するのではなくて、現代文明の過ちはどこから出発したのか、それを克服するためには

どうすればよいのか。やはり、工学（科学技術）を私たちは徹底して学んで理解し、その本当の姿を人間の手に取り戻す必要があると思っております。芸術工科大学という名称は、この考えから生まれました。

繰り返しますけれども、芸術工科大学は、東北の自然の大地であればこそ意味をもちます。そして、東北をもうこれ以上、ぶち壊すことを許さないという、決意に満ちた大学でなければならぬと思います。

たくさんお話をしたいのですが、時間の制約がありますので次に進みます。こうして大学設立の理念とその骨格を整えながら大学づくりが進んでまいりました。

渡部助役さんも、高橋副知事さんもお辞めになられて、新しい人に代わりましたが、大学設立のための努力はひきつづき燃えつづけました。市の人たちが、なんとしても大学をつくりたいという希望に燃えて活動をしておりました。だんだんと、私がいま申し上げたようなとてつもない夢物語のようなスケールの話を見せていただいたばかりに、私はそれが正しかったと思っておりますけれども、どうも市の力だけではやりとおせない、県の力もお借りしようというふうに考えたのが金澤市長さんと渡部勝雄さんでした。

そしていつの間にか、金澤市長さんが、板垣知事さんにお会いして、何とか一緒になって山形に、世界のために役にたつ、日本の未来のために東北に大学をつくらうということを持ち掛けました。

ちょうどそのころ、やはり県のほうでも知事さんを中心に、山形に工科系の大学をつくらうという運動が起こっていたと聞きおよんでいます。ですから、それがたいへんうまく噛み合ったようでございます。その辺のところを、私はこのように考えております。

この大学は山形市が船体を作りました。そして立派な船体はできたけれども、強力なエンジンが

欲しい。という願いが県に届き、県がそれじゃあすごい馬力のエンジンを取り付けてやろうということになりました。そしてこの船が出来上がったかのようにみえます。おそらく、立派な船が出来上がると思います。仮にこれを山形丸と称したらどうだろうかと考えております。

しかし、非常に大事なことは、この船は船体をつくったのは市の人たち。エンジンを取り付けたのは県の人たち。しかし、この船主はあくまでも県民です。私はこのところをもし忘れるようなことがあつたら、この大学はやはり駄目になると思っております。永遠にこの大学は、県民の夢と希望を託した大学であり、巨大な船でなければいけない。この大学をつくった資金は、全て県民と市民の一人ひとりの血税の結集でございます。

私がこんなことを申し上げるのは僭越かもしれませんが、間違いなくそうでございます。したがって市長さんも知事さんもお苦勞をされましたけれども、私はどうしても忘れてはならないのは、県民のための大学である、ということですよ。県民の汗と涙の結晶で出来る大学であるということ、永久にこの大学に刻み込んでおきたい、そうあつて欲しいと、皆さんにお願いしたいと思っております。そのことを忘れたら、「おれがやった」「あいつがやった」というようなことで、やがてこの大学はどっちへ走つていくかわかりません。

したがって、どこでも言われる言葉ですけれども、初心忘れることなく、長い将来を見つめて大学づくりにどうぞ力を注いでいただきたい、そう思っております。

それから私どもの果たす役割は、では何だろうか。私はこのように考えております。確かに山形にこんな大学ができれば素晴らしい。それは日本のためだから、東北のためだから、いや世界のためだから、新しい世紀のために日本人の果たすべき役割を、あその場所で大学をつくつて果たしてみたいと、そういう夢を、私もまたこの大学に託したいと思っております。

したがって、私どもの果たす役割は、当分のあいだ、一等航海士ぐらいなものにさせていた
たい。そしてこの船は、言いかえれば、私は政治のことはさっぱりわかりませんが、県と市がい
わ幕末にたとえたら、薩長連合が成った。そして、あまり上等でないですけど、私どもはさし
ずめ坂本竜馬だと、そう位置づけていきたい。そう思っております。薩長連合が成って、新しい夜明
けがくれば、私どもは静かにこの地を去って、京都からこの大学を全力をあげて支援していき
たいと思っております。

したがって、私どもはほんとうに地位もいらないし、名誉もありません。ただここに素晴らしい
大学ができてくれれば、そして京都の私どもがつくっている大学と、本気で腕を組んで、スクラム
を組んで、日本の新しい芸術作興のために、民族の歴史のために役に立つ大学ができれば、それ
よしと、思っております。

さて、いま申し上げましたようなことを大前提として、理事会のメンバーが決定されてきました。
まず、芸術、美術全般にわたって造詣が深く、戦後日本の美術批評、美術界をリードされてきた河北
倫明さんが、この理事に加わってくださいました。おそらく初代の名誉学長になられると思います。
それから、どうしても政治・経済の国際的な流れを知らない大学は必ず取り残されていく。した
がって、政治・経済の国際的な視野でものを見て力になってくれる方がどうしても必要です。その
上に東北について熟知している人、いろいろ考えた結果、草柳大蔵さんに決まりました。

それから、工学、とくに都市工学を中心にした現代工学史の分野では、東大の伊藤滋さん。ご承
知のとおり素晴らしい世界的な学者でございます。この人が選ばれました。

それから歴史。歴史の専門家がどうしても必要です。東大の木村尚三郎さんが、その任に当た
てくれることになりました。

工業デザインの分野では、栄久庵憲司さんが理事に就任してくれることになりました。グラフィックデザインの領域では粟津潔さんをお願いいたしました。現在日本で最もエキサイティングに活躍しているデザイナーです。

専門共通講義科目及び一般教育科目の両面にわたってご指導いただくのが東京大学の芳賀徹さんでございます。この方は山形市の出身で世界比較文学会の会長も勤めており、国際日本文化研究センターの教授も兼任されております、梅原猛先生の推薦で決定いたしました。

伊藤善市さんという方がおられます。この方は東京女子大学の教授をしておられます。県の開発を中心にした作業にもう二十年も携わっておられるようです。この方に一人加わっていただきました。先ほど申し上げた伊藤滋という人は、伊藤善市さんと同じように、山形市のそういう分野での顧問のような仕事をしておられる人でございます。最後に学長候補でございますが、東京大学の久保正彰さんに決定いたしました。先生はギリシャ古典の優れた研究者であります。芸術にも工学のいずれの分野にも造詣が深く、芸術工科大学の教育にはその優れたバランス感覚を発揮され、いづれか一方にとられない方法で、この大学教育をリードされていくと確信しております。私も理事会の末席に加えさせていただきますが、当然のこととして、知事さんと市長さんが県民と市民の代表として、この大学に参画いたします。

■大学運営の基本組織

私は、理事会こそがもっとも大切な場所だ、もっとも大切な組織だと、そう思っただけで学校づくりをやってきました。理事会というのは、大学の未来を指し示す見識と能力を持たなければな

りません。大学のポリシーをつくりあげていくのが理事会の役目でございます。

ここで大学設立の理念と思想が生まれ、大学運営の経緯と脚本が書かれ、舞台装置がつけられます。更に縁の下の力持ちまでやっていくのが、私は理事会だと思っております。そして、それにふさわしい教職員と一緒に若者たちに対峙していく。これが私は大学組織のあり方だと思っております。

今までの大学は、教授会の権限が大きすぎます。ですから、教授会と理事会の関係がうまくいきません。理事会はただ経営の責任を負えば良い。教授会は教育について考えれば良い。こうした考え方は過去の遺物です。ご承知のとおり、多くの大学で、理事会と教授会がいわば敵対する関係にあるかを見えます。相互に深く関わって理解しあう関係こそ大切ではないかと思っております。そうでなければ生命力をもった大学をつくることはできません。自由で爽やかな激論が保証される大学、しかる後一丸となって未来を考える大学でありたい。どうしても教授会と理事会が一体となって行動していく必要があると、そう考えております。

話をもう一度最初に戻しますが、たかが大学一つというふうには、どうしても思えませんし、どうぞそう思わないでいただきたいと思えます。もし今、山形県民が、考えられるかぎりの未来に向って果たすべき役割を自覚したときには、平成の松下村塾を山形がつくるという決意に満ちたお気持ちをぜひ持っていたきたい。そういうお気持ちで、この大学の行く末を案じていただきたい。そして、この大学に携わる人たちは、皆このことをいつも語りながら、いつも胸に秘めながら、スクラムを組んだ大学にしていきたい。そういうふうには、どうぞお考えいただきたいと思っております。

そこで、ここまではきました。おそらく大学はできるでしょう。文部省との折衝で県の原田君や横井君、市の市川君たちが、すさまじい努力をいたしました。いま大学をつくるということは大変

なことでした、なかなか文部省は言うことをきいてくれません。県の人たちは大変見事でした。

それからもう一つ。あそこの大学の敷地の地権者たちから、言葉は悪いけれども、なんとかこの土地を売ってくれ、大学をつくるのだからと、召し上げる役割を果たしたのは、渡部勝雄さんを先頭に市の職員の人たちでした。これもまた、とても言葉でつくせないご苦労の連続であったように私は記憶いたしております。

そして、ほんとうにいい大学ができつつありますけれども、実はここまでなら可能な範囲でした。ほんとうに努力をして、情熱を傾けて志をもって闘うかぎり、必ず実現します。問題はこの大学ができたあと、その運営と将来に向って舵をとって進めていくという作業は、まことに困難な仕事でございます。私は、したがって繰り返し繰り返し同じことを申しあげますけれども、一所懸命で努力をして、ほんとうに汗を流して、県民の血税をいわば湯水のごとく使って大学をつくって、その大学がもし初心を忘れて、ほんとうに立派な大学にすることができなかつたとしたら、これはもうなんともお詫びのしようもないことになってしまうと思います。

ですから、大学人たちが決して過ちを犯さないように、けっして私心に捕らわれないように、時として自己を虚しうして、この大学の存立のために命かける人たちであつて欲しいと思います。